

**さざなみ** : **滋賀医科大学附属図書館報** No.29  
(1987.9)

発行年	1987-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10422/1140">http://hdl.handle.net/10422/1140</a>

ちどなみ



No. 29

目 次

1987 年 9 月

附属図書館長就任に当って .....	佐々木武史 .....	2
バリ島の白い黒人 .....	小林 忠男 .....	3
◇特集◇ 夏休み海外旅行記		
十日間の中国旅行 .....	朴 真紗美 .....	5
韓国の医学生と交流して .....	久保田拓志 .....	7
◇連載◇		
古医書への御招待		
全身麻酔手術を行った漢蘭折衷の医家.....	松 本 治 朗 .....	9
図書館の活動(62.7.1～9.30) .....		10
編集後記 .....		10

本学関係者寄贈図書

寺田 信 国 (外科学第一講座)

楽しく学ぶ癌免疫学 寺田信国著 (メジカルビュー社 1987)

ありがとうございました。

# 附属図書館長就任に当って

佐々木 武史

このたび図書館長を命ぜられ思いがけない重責に戸惑っております。図書館は利用しますが館の側に立ってものごとを見る経験は初めてです。責務をまっとうするべく努めますので御指導御助言をお願い致します。

就任の翌日、近畿地区国公立大学図書館協議会に参加のため和歌山に参りました。その印象ですが、この会議の主役は館長ではないと云うことを認識しました。専門職としての事務系のベテランがキラ星の如く列席され、図書館は大学の最も重要な機関であるという見解のもとに、情熱的な雰囲気でありました。また図書館の電算化システムにおけるデータベースの開発は今後最も注目を集める事業ですし、館員のお仕事も更に専門的局面を迎えられることと思いました。7月1日からの第34回国立大学図書館協議会総会に出席してますますこの印象を深めました。

従来の図書館の大きな役割は自分で所有できない、又たまにしか見ない書物や資料を見たい時に手軽に見ることのできる場所、提供する場所であるとも思います。

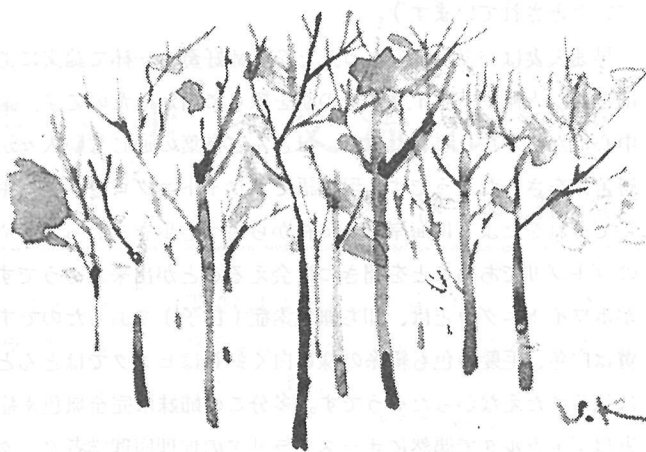
1965年、私はニューヨーク市のコロンビア大学医学部(W. 168 St. ブロードウェイ)のビジティングフェローとして地域精神医学を学んでいました。たまたま私はモーニングサイドキャンパス(本部キャンパス)のセント館を訪れた。ここはイーストエイジアン図書館があり地下3館の図書庫が日本部門であった。1階には日本の新聞なども置かれていた。最初はロビーで新聞を見ていたが、医学部のIDカードをもらってからは許可を得て自由に書庫に入出入りできることになり、1人用の小さいエレベータを自由に操作することも許された。書庫は完全恒温恒湿で換気も良く、本臭さを全く感じない。窓は無いが適度に明るい。書籍は出し入れが自由で、書架の間に1人用の小机がかなり置かれている。当時の日本の図書館と比べると大変自由で住み心地がよい所であった。下宿がW. 102 ブロードウェイなのでW. 116 ブロードウェイの本部キャンパスまでは歩いて15～20分の近さで、医学部附属サイキアトリックインスティテュート(P.I.)と、スクールオブパブリックヘルスでの講義と現地施設セミナー(火)の無い時にはよくこの図書館に通った。P.I. はハドソン河に面しジョージワシントン大橋を眺める屈指の美しい環境にあり、春先には無数の流水がおりてきた。

図書館で先ずびっくりしたことは大日本帝国統計年鑑の完全バックナンバーであった。これは日本では<sup>①</sup>のため初めてのものであった。この本も日本海軍の印が押してあった。これは日本の“すべて”の統計(土地、人口、死因、伝染病、学業、気候、住宅、水道、災害、犯罪、産業、その他)を集めたもので、第1巻は明治15年発行であるが、統計は明治9年より掲載されている。第2巻には千島30島が日本領土として記載されていた。バックナンバーの最終は1951年の別巻2であり英語と並べてあった。

次に驚いたことは発禁本の収集であり、“地下”時代の共産党発行の新聞や資料の山であった。

年鑑及びその他の持ち出し可能な本は、医学部の地域精神医学ディビジョンの女性秘書によって私の指定する頁を全部ゼロックスしてもらった。週に2回ほど借り出し、風呂敷き包みにした部厚い書物を1RTサブウェイで運んだことが懐かしい。“風呂敷”は常に車内の注目を集めた。秘書は驚き呆れ「いつまで？」と泣きそうになっていた。気の毒であったがコピーは製本して座右にある。

その他、衛生学上興味のある日本の畳についての風俗、社会、民族、歴史、文化、生活関係の多くの資料及び京町絵図細見大成（天正、寛永、承応、寛文、貞享、元禄、宝永、宝暦、天明、天保、慶応）なども圧巻であった。古絵巻の複写本もあった。和辻さんの『風土』にも改めてゆっくりお目にかかった。“一体いつになったら一通り目が通せるのだろうか”と日記にも書いてある。日本の“世間づきあい”を離れたニュートラルな生活において図書館はいつも心のオアシスでありました。



## バリ島の白い黒人

小林忠男

小生の知人でオランダ人夫妻（主人：理論物理学者、夫人：病理学者）がいます。彼らは、今年も1カ月間の夏期休暇をインドネシアで過ごして、その帰りに日本に立ち寄りジャカルタの図書館で見つけたある一冊の本の中からスタートしたユニークな旅の話を私にしてくれたので述べさせて頂きたい。

今年も、と言ったのはこの夫妻はこのところ毎年アジア地域にある一つの国や地方に長く滞在して、珍しい体験を求めて彷徨するのが楽しみであるらしく、昨年の夏も自転車で日本中をかけめぐっています。自転車旅行と言っても訪問地で自転車を借りるレンタルサービスではなく、オランダから自転車を持込んで日本人も驚くような穴場を見つけては旅をしている。なお、昨年の夏に日本を訪れた際、貴学病院長岡田慶夫先生を尋ねられた途中、滋賀医大図書館を訪問されている。又、

一昨年の中国では子宮癌検診のスライドを直接現地で検鏡して、中国人婦人のHPV（ひとパピローマウイルス感染細胞；コイロサイト）感染の頻度についての論文を旅行中に書き上げ、翌年のランセット（1986年、1月25日号、205ページ）に発表しています。

このインドネシアの体験談は、この7月ジャカルタでの病理学に関するワークショップを終えた翌日から始まります。ジャカルタ市内にある公立図書館（市民図書館）－それは古びた建物で夫妻によればジャワの古い仏教遺跡にも匹敵する程のものであったとの事です（？）－夫妻はこの図書館で偶然に一冊の古いオランダ語で書かれた医学雑誌を見つけたそうです（この本は今までにおそらく誰一人ひろげた様子もなく、ほこりがあつくもっていたそうです）。本のタイトルは「バリ島の白い黒人」というものでオランダがインドネシアを統治していた時代にオランダ人医師によって書かれたものであるらしく（ご存じのようにバリ島には16世紀の末には既にオランダ人が訪れていたとされています）。

早速夫妻はバリ島に向かうことを決め好奇心一杯で論文にあった「白い黒人」ホワイトニグロとはどんな人種（トライブ）なのかを探りに出かけたのです。論文に記載のあった地方とはバリ島の中心地からかなり離れた村で、ほとんど言葉の通じない人々からホワイトニグロを捜し出すのに大層苦勞をされたようです。現地語でホワイトニグロを示すゴキブリと言うやや蔑視に似た言葉を覚えてそれをたよりに海岸沿いに村から村へと歩きまわって、やっとの思いである村にいる姉妹が噂のゴキブリであることを聞きつけ会えることが出来たそうです。多くの読者は既にお解りでしょうがホワイトニグロとは、即ち無色素症（白子）であったのです。その姉妹の家庭は非常に貧しく皮膚は白色、毛髪の色も絹糸の様に白く虹彩はピンクでほとんど屋外で目を開けることが出来ずそれは見るにたえなかったそうです。多分この姉妹は完全無色素症であったと想像されます。その後夫妻はジャカルタで偶然にオーストラリアの地理病理学者クック博士と出会い早速バリ島での話をし、その無色素症の患者にサングラスを送る事を決めたそうです。今、彼らにしてあげられるのはこれぐらいだからということをつけ加えていました。

（済生会滋賀県病院 検査部病理）



インドネシア諸族 左はバリ島の少女、右はスマトラ、ジャバ附近の青年

「平凡社世界大百科事典」より

# 十日間の中国旅行

朴 真 紗 美

7月31日（晴れ）、大阪空港を発ってからわずか2時間10分で中国上海空港に到着しました。この日から10日間、私は東洋史の衣川先生のもとで25人の学生旅行に参加しました。上海は連日36度という猛暑で、海に近い影響もあり湿度の高い土地です。ここの人口密度は東京の約4倍で、私達が歩いた“上海の浅草”と言われる豫園商場は、どこを歩いても人人人、わずか数mの路地の両側には、商店がひしめき合い、しかも多くの人がある狭い道路を自分の家の一部であるかのように屋外に椅子を持ち出して涼んでいるのです。また、三交代制が施かれているため、真昼間から多くの男の人が街をうろつき、まるで浮浪者のようにさえ見えました。そして街のあちこちに生ゴミが山積みされ、その悪臭が街全体を覆っています。今までに抱いていた“上海”の活発で明るいイメージとのギャップが大きく、果たしてこれから10日間、この国にいたることができるのだろうかと不安を抱きながら私達は次の日に寧波に飛びました。

寧波は、日宋貿易、日明貿易の拠点として有名であり、またこの近くには、仏教寺院が数多く存在し、日本仏教界とも大変密接な関係を持っています。ここで私達が訪問したのは、保国寺、阿育王寺、大童寺、天一閣であり、御殿や部屋の数、仏像の数や大きさなど、どれをとっても日本とはスケールが違い大きいものばかりで、さらにそれらが非常に細かい所まで配慮がなされているのです。しかし、その数が多いにも多いため、日本のように手厚く保護されてはいず、あちこちに見られる看板もいろいろな

書体で書かれた力作ばかりですが無造作に掲げられているのです。しかも、私達が現在見物できるこれらの品々は本来存在していたものの一部であり、大部分は毛沢東以後に出現した四人組によって壊されてしまったそうです。現存しているこれらの遺物を見ているうちに、その背後に数えきれぬほどの姿を消した物を思い浮かべ、この国の長い歴史の流れに底知れぬエネルギーを感じました。

次に私達が訪問したのは、寧波からバスで3時間行った所の天台山です。日本天台宗の開祖最澄がここから天台宗を持ち帰った地でもあり、国清寺を始めとする72の寺がこの山に存在していたと言われています。まさに修業の山というのがぴったりのひどい所で、観光客向けのホテルはほとんどなく、当初この地に2日間滞在しいろいろな寺を廻る予定でしたが、この地はとても耐えられないということで、私達は一晩だけ泊まり次の日の午後にここを出発しました。

しかし、私にとっては天台山は大変貴重な体験ができた地です。私は京都の寺々をよく散歩するのですが、京都三千院にある王羲之の“鵝”字の拓本を大変気に入っています。この字には何か魅せられるものを感じるのですが、実はこの碑の原本がこの国清寺にあったのです！しかもさりげなくある壁にはめ込まれていたのです。これを発見した時の驚きと感激は自分でも異常な程でした。一緒に旅行をしているほとんどの学生が天台山に不満を言っている中で、私一人満足感に浸りながら、紹興へ向かいました。

紹興に着いたのは午後4時半。食事までに2



時間あったので、一人で町を散歩することになりました。ここは上海とは違い、悪臭もなく、人も多くなく、人の表情も幾分穏やかな住みよい町です。通りを歩いているといろいろな店があり、まずは好物のバナナを買いました。値段を紙に書いてもらって代金を払ったのですが、言葉が通じないので、自分が完全にある別の空間に存在している様に思うのです。目という窓口を通して外界の様子を覗いている様でした。この辺りで売られているものは、「友誼商店（外国人専用のみやげ店）」よりもずっと安く、日用品が多いので見るだけでも楽しいものでした。翌朝には王羲之の書で有名な蘭亭と漢時代に人工で作られた東湖を訪ずれ、予定外の紹興訪問でしたが、この町も独特の雰囲気を持った静かな町でした。

旅行第6回目の午後には杭州に着きました。杭州は浙江省の省都であり、中国六大古都（北京、西安、洛陽、開封、南京、杭州）の一つです。南宋時代は臨安府と呼ばれ中国史上空前の都市生活の発展を見、「天有<sub>二</sub>天堂<sub>一</sub>、地有<sub>二</sub>蘇杭<sub>一</sub>」とまで言われ西湖を中心とし三方山に囲まれた美しい都市です。ここには「琵琶湖八景」ならぬ「西湖十景」があります。この日は湖の孤山島にある西泠印社を見学したのですが、この石碑も一部が四人組によって壊されたそうです。中国の文化財に関するこの四人組の名を聞く度に、戦後の中国がいかに困難な道を歩んできているかを考えさせられました。杭州はかなり観光地化されており、ここに来て中国で初めて喫茶店に入りました。一般に中国人は珈琲を飲む習慣がないので、“喫茶店”と書かれていても珈琲を置いている所は大きなホテル内に限られている様です。久しぶりのひきたての珈琲はとてもおいしく、ついつい飲みすぎてしまってその夜はあまり眠れませんでした。杭州には3泊したので、その間に何ヶ所か廻ったのですが、その中で扇子工場を見学した時、扇子に書かれ

ている字や絵がすべて手描きだと知り驚きました。各個人いろいろな書体で字を書いているのですが、中には虫めがねを使って2mm四方の大きさに扇子の上に字を書いている者もいるのです。どの人の字を見てもかなり書き慣れていて、日本でなら書家としてでもやっていけそうな人ばかりですが、驚いたことに、彼らはこの会社に就職してから筆を初めて持ち、わずか半年から1年で一人前になるそうです。その研修期間はひたすら一つの字体を、一日8時間練習するのだそうです。私は趣味として書道が続けているのですが、彼らが無表情に筆で字を書き、完全にそれを一つの労働と考えていることを知り、大変ショックでした。

9日目の朝にここを発ち、電車で上海へもどりました。この電車には1等と2等の席があり、1等に座るのは外国人がほとんどですが、桃色のカーテンとシートが使われているのには少し驚きました。車内を廻って来る車掌は女性がほとんどであり、バスの運転手が女性であったりすることもあります。この国には男女平等に職場の機会が与えられているようですが、彼女らのしぐさや行動に、女性らしさがあまり感じられなかったのは私だけでしょうか？

9日目に上海に着いた時は、街の悪臭も不衛生な点もそれほど気にならず、むしろ多くの人の中で各人が自分の生活を遅く生きている印象を受けました。中国は“質より量”の時代がまだまだ続くようですが、現在彼らの生活は過渡期に入り、街にも建設中の近代的なビルがあちこちで目につきます。そういった建物のほとんどは、現在は観光客用に建てられ、中国庶民の生活に直接影響を与えてはいませんが、彼らの生活レベルが先進国のそれに追いつこうと、遅々たるものではありませんが確実に向上しているのを感じました。

今回の旅行は上海とその近くの街々の5ヶ所を廻ったのですが、この様に狭い範囲内に於て

すら、各街によってそれぞれ全く違った独特の  
雰囲気を持っているのですから、中国全土を見  
ると、一体どこでどのような生活が行なわれて  
いるのか、大変神秘的だと思います。もし、も  
う一度中国を旅行する機会があれば、今度は北  
の方でも廻ってみたいですね。

終

(滋賀医科大学 2 回生)

六體も唐詩一首

秦時明月漢時關萬里長  
秦時明月漢時關萬里長  
秦時明月漢時關萬里長  
秦時明月漢時關萬里長  
秦時明月漢時關萬里長  
秦時明月漢時關萬里長  
秦時明月漢時關萬里長  
秦時明月漢時關萬里長

## 韓国の医学生と交流して

久保田拓志

最終日のソウルは雨であった。しかもどしゃぶりの。大決心をして買った上等の皮ぐつをドボドボに濡らしながら、海外旅行者なら誰もが味わうであろう異国の寂しさを最終日にしてやとかみしめるはめになったのである。実にすばらしい旅であった。それは予期に反したすばらしさであった。出発前の私はいささか憂うつだったのである。韓国……催涙弾、ゲバ棒学生、機動隊、こんなイメージしかなかった。事実、キンポウ空港でひたすら目立ったのは軍人の姿であったし、税関のチェックは厳重さを極めていた。気の弱い私は指先が震えていたのである。相手が逆に気をつかって「久保田サン！」と日本語で笑いかけてくれたほどだった。あの笑顔を私は一生忘れないであろう。

空港ではキリスト者医科連盟が迎えをよこしてくれていた。車で一路会場に向う。その頃になってようやく緊張が解けた私はいささか興奮ぎみであった。何せ初めての海外旅行である。顔に吹きつける風一つ違って感じられる。よし、どんなことも見のがすまい、聞きもらすまい！

眼鏡をおもむろにずり上げ、目を見開き、鼻の穴をふくらませ、私はメイン会場に足を踏み入れたのであった。

今回、キリスト者医科連盟が主催する、日韓台の交流会 Exchange program に参加させていただいたのだが、当初の決意はどこへやら。正直言って肝心の討議のことはほとんど記憶にないのである。テーマは「キリスト者における性の倫理」これから先、結婚問題で悩まねばならないであろう私にとってドキリとする題である。あまりに切実すぎて、ウトウトと眠っていてもとびおしてしまうような題である。にもかかわらず、にもかかわらずにである。!!(キ医連の諸先生方ゴメンナサイ)私は広い会場の片隅でスヤスヤと眠りこけていたのであった。私の記憶はそれからいききにマロニエパークでの延世大学の学生達との交流会、さらにとんで、翌日のソウル郊外での晩餐会へととぶ。延世大生達との交流は本当に良き思い出となった。マロニエパークは祝日とあって多くの学生達がぐり出し、夜遅くまで歌い続けていた。韓国の若



者は歌好きである。そこかしこに円陣をつくる  
とたちまち歌声がわき上がってくる。一人の学  
生がすばらしい声を披露してくれた。オマエも  
何か日本の歌を歌えと言われたが、私は土台人  
前で歌うのが苦手である。歌うときは一人寂し  
くシンミりと、決めているのだ。今回一緒に行  
った羽田さん（浜松医大生）が歌ってくれ、な  
んとかその場はしのいだ。夜風が涼しく心地よ  
かった。延世大生の中に清楚な美女が一人いた。  
「風が涼しいねー」などと気どって話しかけて  
いたら、野郎が割り込んできてしまった。どう  
やら彼女はあのグループのシンデレラらしい。

今回の旅で一番印象深かったのは、人々の心  
のこもった歓待であった。その象徴があの食べ  
物の洪水であった。きわめつけは2日目の晚餐  
会。私は生まれてはじめて豚の丸焼きなるもの  
を見、その残酷さに眉をひそめ、おののいてい  
たのだが、次の瞬間には出された肉に舌つづみ  
をうち、アンチョビーの激辛でついにその舌を  
ねじまげウマイウマイとはしゃいでいたのであ  
った。豚の丸焼きの影に隠れてしまったが私に  
はもう一つ忘れがたい料理がある。その名はビ  
ビンバ。何でも韓国語で「かきまぜる」という  
意味だそう。一人前の鉄鍋の中に米をベース  
に色んな具をのせて出してくれる。パチパチと  
鍋は熱く焼けていて、へたにさわるとやけどを  
する。これをヒタスルかきまぜるのである。ス  
ープをかきまぜるのはワケが違う。なかなか  
どうして気合がいる。かきまぜ疲れてふと隣を  
見ると韓国のドクターはまだかきまぜている。

私もあわててかきまぜなおした次第である。

すべてのプログラムが終わってから私は青戸  
ドクター（淀川キリスト病院）に連れられて全  
州、光州の病院を見てまわった。この番外の旅

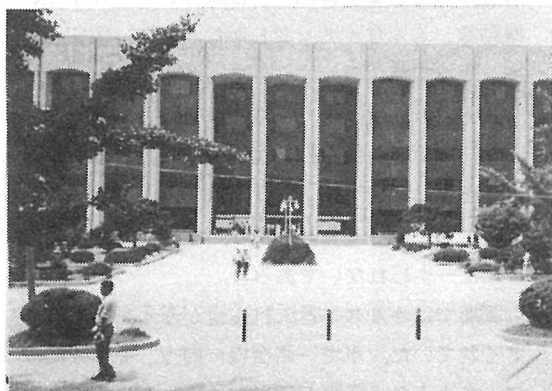
のことは青戸ドクターに聞いていただきたい。  
光州の朴洪培先生の御好意で人に言うのものはば  
かれる豪遊をしてしまったのであった。

この旅は私にとって何だったのだろうか。私  
は Exchange program に参加したのであ  
る。かの地で「キリスト者における性の倫理」  
について一見識を養って帰ってくるはずだった  
のである。しかし蓋をあけてみればひたすら楽  
しく、うれしく、そして常に満腹だった。ただ  
それだけであった。それならそれでよし、と今  
の私は開きなおってふんぞりかえっている。生  
まれてはじめての海外旅行であった。この世界  
の広さを、人々の営みの多様性をかいま見せて  
くれた旅であった。韓国の学生達あの無類の  
卒直さと明るさは私に若者とはいかなる存在で  
あるかということを見せてくれた。かくいう私  
も一応「若者」である。しかしこの「若者」は  
…。いやもうそのことは言うまい。紙数もつき  
た。

最後に、このようなすばらしい贈り物を与え  
て下さったキ医連の方々に、韓国の諸先生方に、  
そして何よりも我らの主に心からの感謝を捧げ  
たいと思います。

本当にありがとうございました。

（滋賀医科大学 5 回生）



延世大学図書館

## 古医書へのご招待

### —全身麻醉手術を行った 漢蘭折衷の医家—

松本 治朗

金瘡要術口授（写本）華岡青洲口述、全一冊

瘍科瑣言（写本） 同上

青囊秘録（写本） 同上

華岡青洲は、文化2年（1805）世界初の全身麻酔による手術を施行した人物として今日名前をのこしている。すでにその生涯については多くの研究があり戯曲化もされている。しかし、青洲の業績としてよく知られている全身麻酔そのものは、彼の独創的発想ではなく以前から中国や西洋でもあった発想である。青洲がどのような経緯で全身麻酔薬『通仙散』を考案したかを明らかにするために彼の医学修業のあとをたどってみたい。

青洲は、宝暦14年（1760）に和歌山県那賀で医師 華岡随賢の長男として生まれた。23歳のとき京都に上り、内科を古医方の吉益南涯に学び、また外科を大和見水に学んだ。南涯は、かの有名な古医方の大成者、吉益東洞の子息であるが、このもとで青洲は傷寒論をはじめとする漢方医学を十分に修得した。また見水は、カスパル流の外科医であり、以上のことから青洲は漢・蘭方の両医学を修得したことがわかる。その当時すでに漢方・カスパル流外科いずれにおいても幾つかの麻酔薬が用いられていたが、漢蘭医学に精通した青洲が両者の知識を結集して新しい麻酔薬を工夫したことは自然の成り行きであった。いわば漢蘭医学の折衷をはかり、両者の長所を生かされたものが通仙散である。彼はひろい眼界をもって一党一派に属さず、その信念は東西古今、内科も外科も合わせて人命を救うに最善を尽くすことにあった。

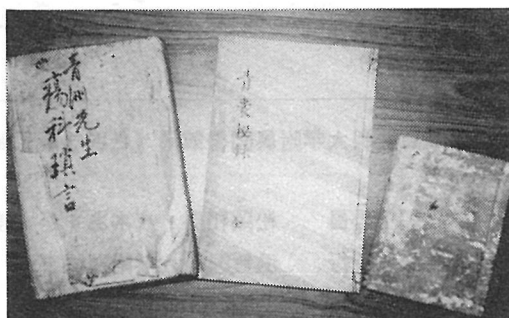
当大学の文庫には華岡青洲の著書として、『金瘡要術口授』『瘍科瑣言』『青囊秘録』の

3冊が収蔵されている。青洲は生半可な知識によって麻酔を用い、その結果ひきおこされる事故を防ぐため自分の技術を秘伝とした。そのため自らの著述は極めて少ない。青洲の麻酔がせっかく世界に先駆けていながらその後に発展がなかったのはこの理由による。これら3冊も刊行本ではなく、青洲の口述を門人が記録したものである。前2者は外科書であるのになし『青囊秘録』は薬学書である。『金瘡要術口授』『瘍科瑣言』を読むと青洲が優秀な外科医であったことがわかる。例えば『金瘡要術口授』では、「医師は患者の風俗にしたがって対応するように努め、治療にさいしては神気をととのえ道具に不足はないかよく調べよ。道具は1スポイト・・・2鶏卵・・・3木綿・・・以下略」とあり現代でも十分に通じる内容である。『瘍科瑣言』では肺癌、乳癌、破傷風など多数の疾患について症状と治療法が記載されている。症状の記載は現代医学からみても極めて妥当なものである。治療内容についても末期癌の対症療法は漢方医学が中心であるが、基本的には現代医学に通じるものがある。また『青囊秘録』には青洲が用いた処方解りやすく簡明に書かれている。通仙散は秘伝であるため勿論ここには書かれていない。

日本国中に青洲の名声はひびきわたり、名医の誉れ高かった杉田玄白、大槻玄沢も青洲に脱帽したことが書簡に残っている。

いずれにしても青洲は偉大な医師であり、外科医としての青洲を知りたい方は『金瘡要術口授』『瘍科瑣言』を是非一読されることをおすすめしたい。

（産婦人科学教室・助手）



## 図 書 館 の 活 動 ( 6 2 . 7 . 1 ~ 9 . 3 0 )

7/1~2 第34回国立大学図書館協議会総  
会(群馬)

8/26~28 昭和62年度図書館等職員著作権  
実務講習会(岡大)

7/20 第41回近畿地区医学図書館協議  
会例会(和歌山県医大)

9/3・8~11 目録システム講習会  
(地域講習会)(京大)

8/19 附属図書館委員会

### 編 集 後 記

4月には学長が、6月には副学長、そして図書館長が替られました。前号の佐野学長に続いて、新図書館長佐々木先生に図書館への憶いを寄せていただきました。学長は、読書とスポーツで充実した学生生活と呼びかけておられましたが、最近の若者は、それに海外旅行がプラスされるようです。夏休みに海外へ出かけた学生諸氏に旅行記を寄稿していただきました。

地域の医療を考えるシリーズ、今回は図書館をよく利用される、済生会の小林先生に、医学・医療と文献資料・図書館にまつわるエピソードを紹介していただきました。オランダからの写真が間にあわなかったのが心のこりです。(S)



滋賀医科大学附属図書館報『さざなみ』No. 29

1987年9月発行

編集委員 松岡和男・八木あすか・渡辺幸子

発 行 滋賀医科大学附属図書館 〒520-21 大津市瀬田月輪町  
TEL 0775-48-2080 Telex SGMLIBJ 5464-911